

所 属・職 位	医学部医学科診断病理学講座・教授	
氏 名	駄阿 勉 (Daa Tsutomu)	
取 得 学 位	博士 (医学)、大分大学、1994年9月	
SDGs 目標	  	

研 究 分 野	診断病理学
研究キーワード	唾液腺腫瘍病理
研 究 内 容	●唾液腺腫瘍の病理診断に関する研究 唾液腺は食物摂取に関するQOLに関与する重要な臓器であり、大唾液腺、小唾液腺の形で頭頸部領域に広く分布する。他の臓器に例にもれず、唾液腺にも腫瘍性病変が発生するが、他の臓器とことなり、腫瘍発生に関与する細胞が多彩であり、特に筋上皮細胞が関わることにより、その組織形態が多彩であり、組織型の種類も多く、加えて、唾液腺腫瘍は比較的稀であることから、一般病理医にとっては診断の難しい領域となっている。また、近年、キメラ遺伝子や、特定の遺伝子の突然変異等、病理診断に直結する分子病理学異常に関する知見の蓄積が著しく、分子生物学的手法の診断への応用が、正確な病理診断に必須となってきている。当講座においては、免疫染色、PCR、DNAシーケンス解析、RT-PCR、FISHを用い、唾液腺腫瘍の診断に資する新規マーカーの検出を試みている。 ●腫瘍の転移に関する研究 健診体制整備による早期発見、有効な分子標的薬の開発等により、癌の治癒率は近年著しく向上しているが、悪性腫瘍は、いまなお、死亡原因一位の地位を保っている。その悪性腫瘍の完治が困難であることの主要因は腫瘍の転移である。転移に関する細胞生物学的な要素として、上皮間葉変換、細胞間接着等があげられ、それに関する分子異常が次第に明らかとなってきているが、いまだ解明すべき部分が多い現象である。当講座では、乳癌、大腸癌等の臨床材料を用い、免疫染色や分子病理学的手法を応用し、転移のメカニズムの解明を試みている。
研 究 業 績・アピールポイント	●論文 2021年. Immunohistochemical Reactivity of Prostate-Specific Membrane Antigen in Salivary Gland Tumors. Head Neck Pathol. 2021年. Clinical significance of sarcoid-like reaction in lymph nodes of gastric cancer patients. J Surg Oncol. 2019年. A Biotin Tagging Immunoelectron Microscopy for Paraffin-embedded Sections. Appl Immunohistochem Mol Morphol 2018年. Difference in transducin-like enhancer of split 1 protein expression between basal cell adenomas and basal cell adenocarcinomas - an immunohistochemical study. Diagn Pathol 2013年. PLAG1 and CYLD do not play a role in the tumorigenesis of adenoid cystic carcinoma. Mol Med Rep. 2009年. Alteration of SMAD4 does not participate in tumorigenesis of adenoid cystic carcinoma of the salivary gland. Mol Med Rep